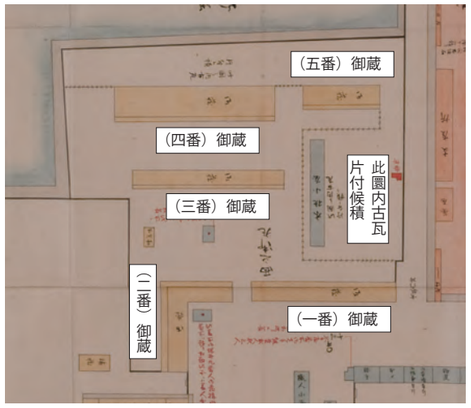
３．発掘調査でわかったこと

◆六番御蔵の礎石や礎石を抜き取った跡を確認したことで、建物の柱の位置や範囲を把握することができました。また、庇を支える柱の礎石跡を検出したことで、戸前（蔵の入口部分）の位置も推定できるようになりました。

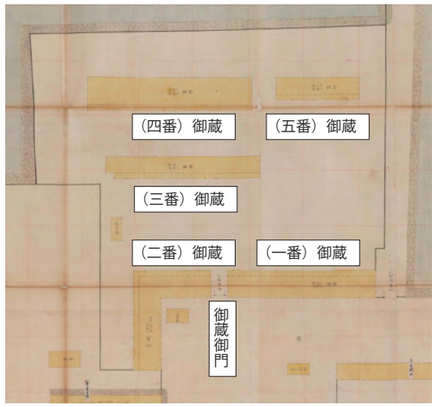
◆一番御蔵の礎石の抜き取り跡や､近代の水路跡（一番御蔵は近代も「倉庫」として利用）を確認したことで、一番御蔵の北・南・東端の位置が分かりました。文献には蔵跡の大きさが記されているため、西端の位置も推定できます。

◆近代（明治時代～戦前）になると、陸軍が米蔵を倉庫として利用したり、撤去して新たに施設を建設したりすることが絵図などから推測できます。発掘調査でもそのような近代の施設の痕跡を検出し、土地利用の変遷を確認することができました。

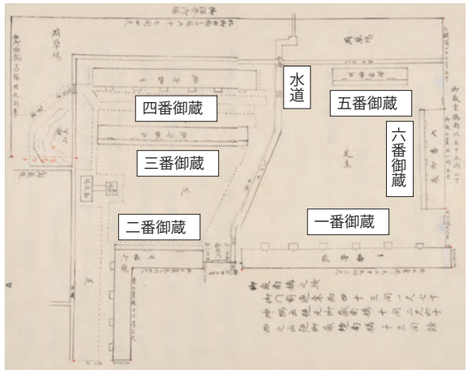
今回の発掘調査により得られた成果を整理・活用しながら、西の丸の整備計画を進めてまいります。



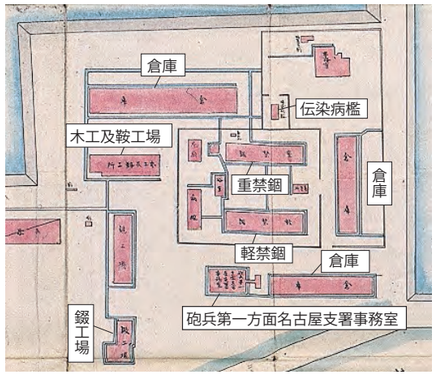
【絵図１】御深井丸内諸御役人詰所御作事本〆所諸番所建方指図（名古屋城蔵）に加筆※宝暦年間（1751-1764）の写し



【絵図２】御本丸御深井丸図（名古屋市博物館蔵）に加筆※天保５年（1834）以前



【絵図３】 金城温古録（名古屋市蓬左文庫蔵）に加筆
※万延元年（1860）献上



【絵図４】名古屋離宮榎多門内総図（宮内庁宮内公文書館蔵）に加筆　※明治 33 年（1900）

※　今回報告した内容は、現時点での見解であり変更する可能性があります。

2022 年 7 月 16 日（土）
名古屋城総合事務所

特別史跡名古屋城跡
西之丸発掘調査　現地説明会

１．発掘調査の経緯

名古屋城の西之丸には、江戸時代に六棟の米蔵が建てられていたことが、文献や絵図などから分かっています。名古屋市では､この米蔵が建ち並ぶ区域（江戸時代には「御蔵構え」と呼んでいました）の整備を行っています。

まず、三番御蔵と四番御蔵については、重要文化財の旧本丸御殿障壁画等を展示・収蔵する施設として､外観の復元が行われました。これらの施設は「西の丸御蔵城宝館」と名づけられ、2021 年 11 月よりオープンしています。

一番御蔵、二番御蔵、五番御蔵、六番御蔵については、蔵跡の範囲を表示するなどの外構整備を計画し、2019 年度に工事に着手しました。しかし、2020 年３月、工事中に六番御蔵の礎石等を重機で取り除いてしまうというき損事故が発生し、工事を中止しました。

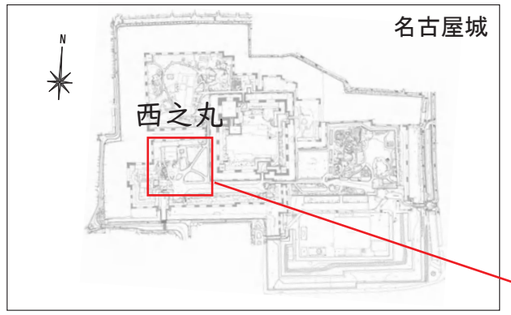
き損部分は、文化庁や特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議及び部会の有識者の指導の下で発掘調査が行われ、移動した石材の元の位置を特定・推定し修復しました。

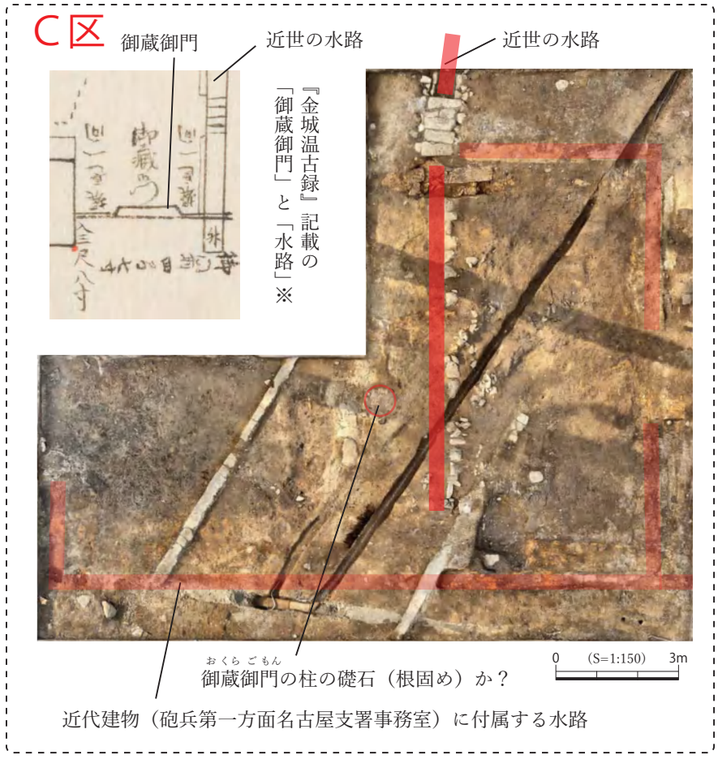
き損の原因の一つとして、これまでの発掘調査が十分ではなく地下の遺構の状況が把握されていないことが考えられました。そうした反省に立ち、今回は、蔵跡の位置や構造などが的確に把握できるよう広範囲にわたり調査区を設定し、発掘調査を実施しています。

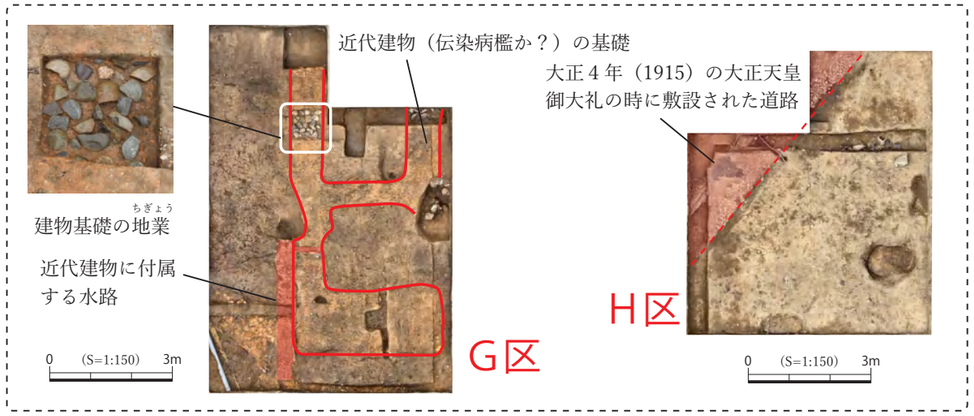
２．西之丸の米蔵の移り変わり（文献・絵図より）

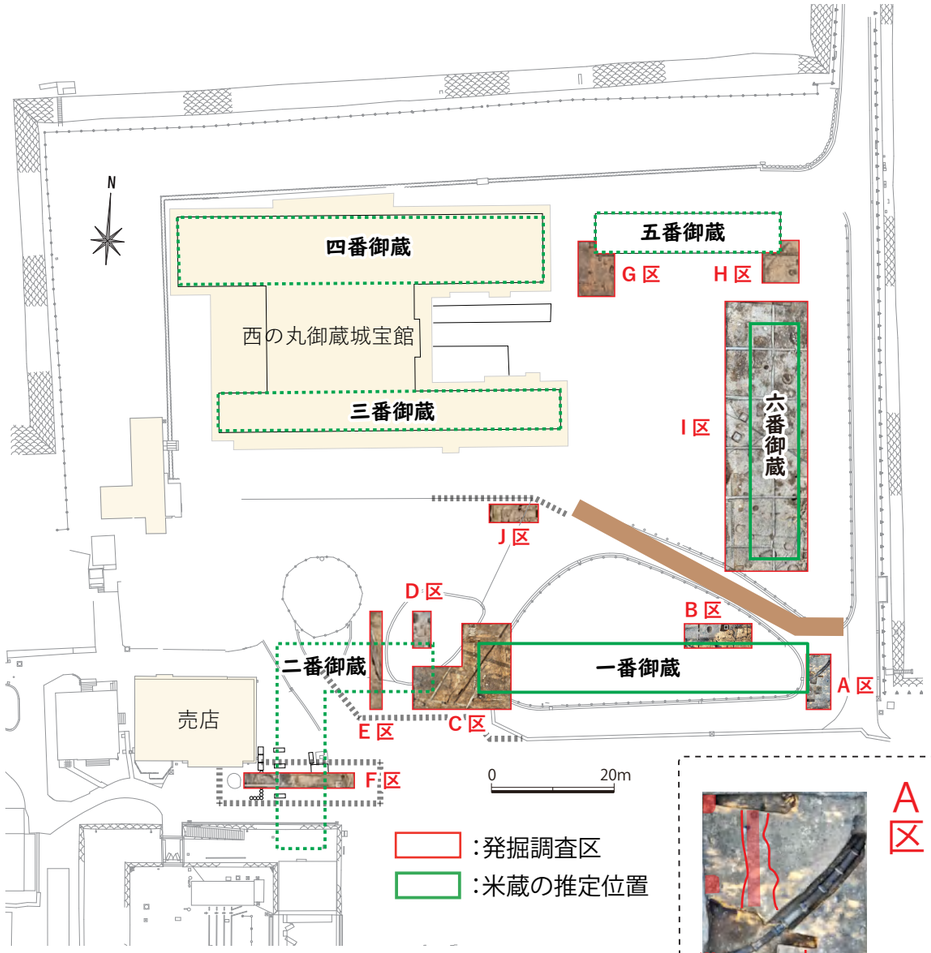
・宝暦年間（1751-1764）以前に米蔵５棟（一番～五番御蔵）が建てられる。
・天保５年（1834）に六番御蔵が建てられる。
・明治６年（1873）～明治 12 年（1879）の間に、二番・五番御蔵が撤去される。
・明治 33 年（1900）までは、一番・三番・四番・六番御蔵の建物は使われ続けたが、大正４年（1915）に挙行された大正天皇御大礼までの間にすべての蔵が撤去される。

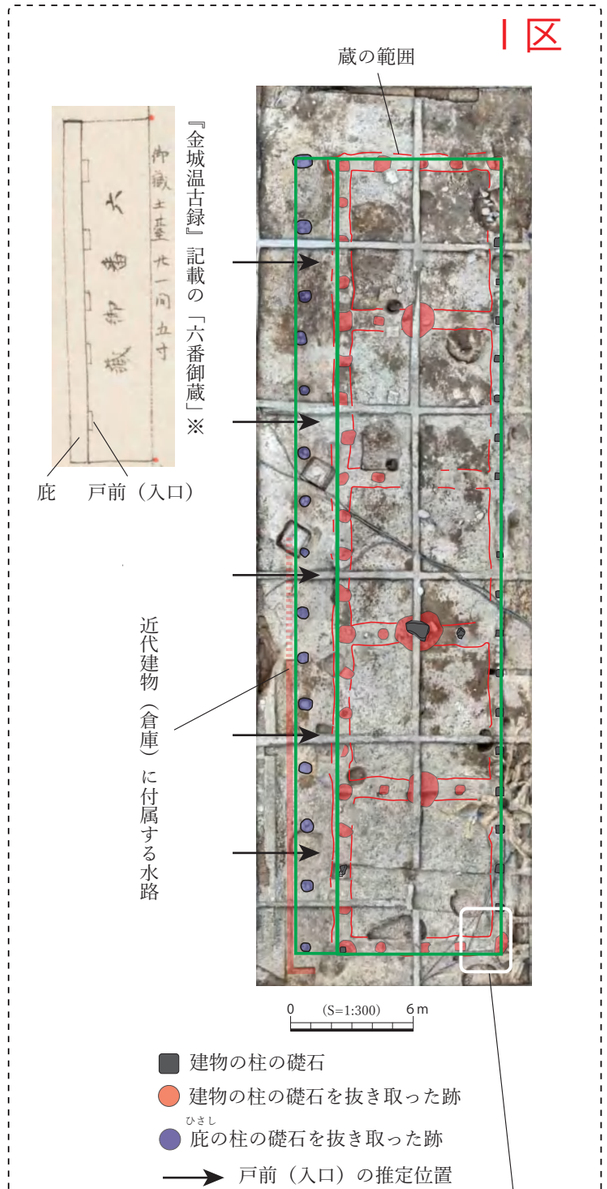
発掘調査で見つかったもの



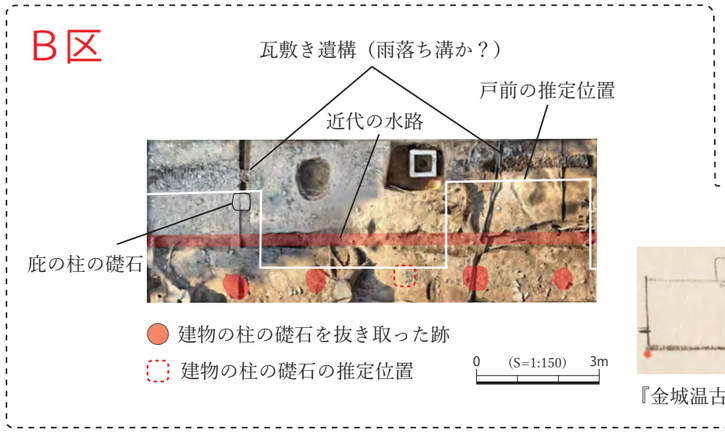


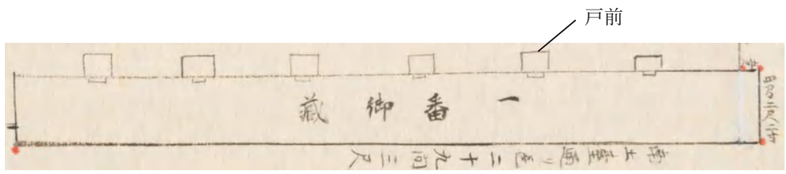






六番御蔵の南東隅（南東から）





『金城温古録』記載の「一番御蔵」※